

『カチアートを追跡して (*Going After Cacciato*) 』 (1978)  
における空想に秘められた可能性

奥田 晃士



## 1. はじめに

アメリカに計り知れぬトラウマを植え付けたベトナム戦争、これを題材にした小説といえば、ロン・コビックの『7月4日に生まれて (*Born on the Fourth of July*)』(1976)がある。さらに、映画ではスタンリー・キューブリックの『フルメタル・ジャケット (*Full Metal Jacket*)』(1987)や戦地でのアメリカ兵の手紙をまとめたドキュメンタリー『ディア・アメリカー戦場からの手紙 (*Dear America: Letters Home from Vietnam*)』(1987)もある。これらは、あくまでも反戦メッセージをテーマにしたものが目立つ。このような作品群とはまた異なった視点でベトナム戦争を扱うのが、ベトナム帰還兵でもある作家ティム・オブライエンである。彼は自らのことをインタビューにて、“Although Vietnam was the impetus and spark for becoming a writer, I do not consider myself a war writer” (McCaffery 263) と称しているが、彼の大半の作品にはベトナム戦争がその影を潜めていることは明らかであり、作家としてのキャリアをベトナム戦争なしで語ることは不可能である。それを自覚した上でのもので間違いないと言えよう。代表作の一つである『カチアートを追跡して (*Going After Cacciato*)』(1978)は主人公のアメリカ兵ポール・バーリン (Paul Berlin) が夜間の監視任務の際に哨戒地点 (The Observation Post) で、脱走兵カチアート (Cacciato) のパリへの旅路を空想し、時にそれまでの彼自身の戦争体験をランダムに回想するという構成で展開される長編小説である。

このバーリンの空想については、Smith が “Daydreams allow this soldier [Berlin] a temporary escape from the war and partial solace as he follows his fathers’s advice to look for the good things during his tour of duty.” (90) と指摘するように、一種の現実逃避の役割を果たしている。この指摘に関してはバーリンが恐怖で怯える描写が戦争体験の回想シーンで多々見受けられることから自明であろう。空想にふけることで、彼は一時的に目の前の現実 (戦争) から目をそらすことができるのだ。さらに、Herzog が “He [Berlin] dose not achive complete understanding, but through imagination he briefly establishes order in and control over his life.” (92) と言及するように、バーリンは空想を通して混沌とした戦時中の出来事や状況を整理し、物事の秩序立てをしたという指摘もある。作中にて、主人公のバーリンは、彼の行なっている空想というのは夢ではなく可能性 (possibility) であるとさかんに仲間の兵士に力説する。彼の空想が現実離れた夢物語ではないとは分かる。しかし、この可能性という言葉に関しては、繰り返し述べられるだけで、具体的に説明はないため、この言葉が示唆するものが釈然としない。

さらに、先の先行研究の指摘ではバーリンの空想の目的は分かるのだが、結局のところバーリンの言う「可能性」が何を示唆しているかは不明である。ただ、現実逃避や事物の秩序立てのためだけに空想物語を作るのであれば、「可能性」という言葉を繰り返し使う必要もない。では、ポール・バーリンが何度も言う「可能性」とは一体何なのか。本稿ではまず、ポール・バーリンが現実世界において関わった二人の人物とのエピソードをもとに、彼の目指していたものを導き出す。そして、彼の空想に目を向け、そこでの登場人物たちとバーリンの関わり合いを踏まえた上で、どのような自己を彼が生み出そうとしていたかを分析し、最終的にはその試みがどのような効果を我々読者にもたらすのかを検討する。

## 2. 勇敢さの象徴 Silver Star

本作品を読み進めていくと、ポール・バーリンはある問題を常に追求していることがわかる。“The issue, of course, was courage. The issue was how to act wisely in spite of fear.” (80) という描写があるように、ポール・バーリンは盛んに勇氣 (courage) という問題を考えている。彼が戦時において強く望んでいたものの1つに Silver Star と呼ばれる勲章がある。これは敵との交戦において勇氣ある行動をした者に送られるものだ。ではいったいなぜ、彼はここまで勇氣というものに対して執着心を見せたのであろうか。このバーリンの行動の要因には、二人の男の存在がある。本章では、この二人の人物とのエピソードをもとに、バーリンが抱えている問題と、彼の理想を指摘する。

### 2.1 ポール・バーリンと父親

作中でバーリンは何度も父親の姿を回想する。父親の“try to look for the good thing” (63) という教えを常に念頭に置いている様子を踏まえると、その存在の大きさがかわかる。父との関係を形作ったものとして、幼き日のバーリンと父親がキャンプへと出かけたエピソードがある (40)。このキャンプでは、バーリンはカヌーを漕ぐのに苦戦し、森で迷子になった。そんなときに常にそばにいてくれたのが父親であった。バーリンが体調を崩したため、キャンプは早めに切り上げたが、帰宅途中に父親と話さうちに、彼の不調はどこかへ消えてしまった。これはまさに父親の存在の大きさを彼が実感した瞬間、“Pals forever” (41) となった瞬間だったのだ。先に言及した教えを聞いたのもこのキャンプの最終日である。

この父親は、建設関係の仕事をしており、バーリンは哨戒地点と空想のいずれの状況でも父親が家を建てている様子を度々思い浮かべる。28章で語られているバーリンの来歴によると、バーリン自体も夏休みに父の仕事に同伴したこともあるという。(Spent a summer building houses with his father. Strong, solid houses. Hard work, the sun) (181) この関係を見ると、主人公バーリンは父親の勤勉性に憧れていた(田吹 49)という指摘は、実際高校時代に“Whether to go to college or follow his father into the house-building business.” (226) という迷いがバーリンにはあったという事実もあって、自明と言える。まさに父親こそがバーリンの理想のロールモデルであったのだ。このような存在であったからこそ、バーリンは戦場においても、父親の教えを肝に命じているのであろう。

父の教えを常に守り、その姿に憧れていたという点を考慮すると、息子として、バーリンが何かいいことを父に報告したいと感じるのは至極当然のように思える。それが彼にとって自らの成長を示す機会となったのだ。このような気持ちが特に表れているのが、第5章で描かれるバーリンの妄想である。バーリンは、哨戒地点にて次のような未来を想像する。

Yes—when the war ended he would ... he would go home to Fort Dodge. He would go home on a train, ...  
At the depot, when the train stopped, he would brush off his uniform and be certain all the medals were in place, and he would stop off boldly, boldly, and he would shake his father's hand and look him in the eye.  
“I did okay”, he would say. “I won some medals.” And his father would nod. (47)

無論、本作中でバーリンが勲章を勝ち取った描写はないため、これは単なる夢想、願望にすぎない。しかし、バーリンにとって勲章を勝ち取ることの1つ目の意義はここに凝縮されている。すなわち、憧れの父親に見せるためだ。キャンプで迷子になった臆病な少年が一人前の男になったと父親に分かって欲しかったのだ。勇気があれば、Silver Star、すなわち勲章が手に入り、そうすれば憧れの存在を喜ばせることができる。このバーリンの気持ちについては、“He [Berlin] would never let on about the fear. Not so bad, he would say instead, making his father proud.” (210) という記載に表されている。だからこそ、バーリンが自らの勇気のなさに葛藤を覚え、Silver Starを望んだ要因の1つはこの父親との関係性にあると考えられる。バーリンは自分が Silver Star を手に入れられるような、ある種英雄のような男となることに憧れを抱いていたのである。

## 2.2 ボール・バーリンとシドニー・マーティン

ベトナムの地に足を踏み入れた後、バーリンが会おう男の一人がシドニー・マーティンである。“The platoon leader, Lieutenant Sidney Martin, was almost as new to the war as Paul Berlin.” (42) とあるように、この中尉は士官学校を出たばかりの新米将校であり、部下が狙撃されているにも関わらずトンネルの搜索を命じ続けるといった融通の利かないマニュアル人間として描かれている。もちろん部下からの評価は高くない。しかし、作品中でバーリンが何度もこの中尉のことを振り返る様子から、彼にとってこの男の存在は一定の影響力を持っていたことがわかる。

ここで、バーリンとその仲間の兵士達の関係性に焦点を当ててみる。例えばドク・ペレットはしきりにバーリンの妄想癖について説明をしようとする。ドクは、バーリンの妄想癖は“an excess of fearbiles” (28) が原因といい、バーリンの臆病さを仕切りに強調する。彼はこの原理を作中で何度もバーリンに説く。ドク自身はバーリンの良き理解者であり、何度も彼を励まそうとするのだが、結果としてこの行為がバーリンに自らの度胸のなさを痛感させることにもなってしまうている。空想中においても、カチアートの追跡を継続するか否かで仲間内で話し合いになった場面では、オスカー、スティンク、ドク、マーフィーらは自らの主張を述べているのに、バーリンは何も言わず、最後にオスカーに振られて“Okay”や“Keep going” (35) と言うだけであり、積極的に仲間意見に意見できる立場ではないことが明らかになる。何より、最終章でカチアートに突撃する場面でオスカーに言われる“I don’t want you. You’re a fuck up. Man, you’re the worst.” (328) や“Go home. Go hide your head.” (329) というセリフをみると、いかにバーリンが仲間内で必要とされていないか明らかになる。こんな場面を空想中においても自発的に生み出してしまふほど、自分の兵士として、男としての不甲斐なさをバーリンは大いに自覚していたのだろう。

シドニー・マーティンとバーリンの関係に関してだが、二人は似たような境遇にあった。先ほど指摘したように、バーリンとマーティンは同じ新兵であった。さらに、もう一つの共通点がある。“He [Sydney Martin] believed in mission.” (163) という描写が示唆する通り、この男は任務に対して強い情熱を持つ人物である。その情熱の根本にあるのは、“he also explained that he cared for the mission as a soldier must, otherwise every life lost is lost dumbly.” (163) と、部下に言い聞かせている英雄的な兵士像である。“The men hadn’t cheered his speech” (163) と完全に部下に相手にされなかったが、いつかきっと分かってもらえるとシドニー・マーティンは信じていた。それほどに自らが抱いていた英雄的な兵士像は正しいと信じていたのだ。理想像を常に持っているという点は、父親をロールモデルとしていたバーリンと重なるものがある。

自らの強い信念に基づいて、シドニー・マーティンは、バーリンを見ていた。丘に登るバーリンの姿を見て、彼は“*He [Sydney Martin] saw the boy as a soldier. Maybe not yet a good soldier, but still a soldier.*” (165) と感じた。バーリンという男を一人の兵士として見てくれていたのだ。この点を、Callowayは“*From his perspective, Sidney Martin admires Paul Berlin with pride.*” (215) と指摘しており、シドニー・マーティンはバーリンに対して一定の評価を与えていたことがわかる。任務に黙々と向き合うバーリンの姿は、マーティンの目には最高の兵士と映るのは間違いない。だが、一方でバーリンにとって、この丘登りは“*the muscles and fluids and tissues moving like a machine.*” (164) といったものであった。“*machine*” という言葉通り、彼はただ淡々と、何の感情も信念も持たずに任務に取り組んでいたのだ。この二人の気持ちのズレというのは非常に対照的に描かれている。

さて、そんなシドニー・マーティンによる無謀な指令に耐えかねた兵士たちは中尉を手榴弾で殺傷 (fragging) することを決心する。オスカーは皆に手榴弾を差し出し、“*I want it unanimous.*” (235) と言い放ち、それに触れることを要求する。ポール・バーリンは一瞬ためらいながらも、流れに合わせて同意の意を示す。しかし、ここでカチアートがその場におらず、同意が得られないために作戦が実行できないという問題が発生する。そこで、バーリンはカチアートの元へと派遣され、彼の同意を得ようとするのだが、“*I won't do it.*” (239) ときっぱり断られてしまう。何度言っても中尉殺しに同意しないカチアートにしびれを切らし、バーリンは無理やり彼の手を手榴弾に触れさせ、同意を得たことにする。そして、全員 (カチアートは無理矢理であったが) の同意が得られ、シドニー・マーティンは殺害される。

ここで奇妙なのが、彼の死に対するバーリンの向き合い方である。彼は作中でフレンチー・タッカーやバーニー・リンのような仲間の死については、こうやって死んだというように鮮明に言及する一方で、シドニー・マーティンの死に関しては詳細な言及をしていない。皆の同意を得たオスカーがニヤリと笑った後に関しては描かれていない。直接的な言及を避けている事実は、バーリンがこの死をきちんと整理しきれておらず、これに向き合っていないことを示唆している。さらに、バーリンは (空想の中で) イランに辿り着いてからふと“*A very sad thing. Cacciato was dumb, but he was right. What happened to Lieutenant Sidney Martin was a very sad thing.*” (247) という思いを抱く。これは空想が後半に差し掛かったあたりの描写で、何の脈絡もなく突如として割り込んでくる。これは他の兵士の死に関しては起きていない事例である。嫌悪感を持っていた相手であるならば、このような反応はしないであろう。さらに、ここでカチアートを肯定している点も、バーリンがこの中尉を殺すことに抵抗を持っていたことがわかる。戦争や任務に対する気持ちのズレはあったものの、先で指摘したように何かと共通点があるシドニー・マーティンの存在が、バーリンの

中で影響力を持っていなかったとは考えにくい。そうでなければ、空想の世界の中において、この男の姿が割り込んでこないであろう。

Smith は、この中尉殺しの際のバーリンの態度というものが、“*gauge as of Berlin's acceptance of his actions in the war*” (68) であるという。つまり、多数の意に抗うだけの勇気がないと、バーリンは物事を受け入れてしまうのである。これこそが彼の弱さである。カチアートが正しかったと述べている点を踏まえると、彼が中尉殺しを望んでいなかったのは明らかである。カチアートのように自分もなれたらという後悔のようにも思える。仮に自分に勇気があって、意見を言えれば、未来は変わっていたかもしれない。何かと共通点が多く、一定の影響力を持っていた男の死という出来事は、大きなトラウマとなり、バーリンに勇気の必要性を感じさせた。だからこそ、勇気としてその象徴である Silver Star を渴望したのであろう。

### 3. 空想と可能性

戦争への恐怖で常に怯える自分と勇敢で男らしくありたい自分との葛藤に悩まされていたバーリンは、夜間の監視塔で逃亡兵カチアートのバリへの旅を想像する。彼は、特に戦地では、恒常的に何かを想像するのが習慣であり、今回の空想もその一環であった。彼の戦争体験の回想は時系列が混乱していた一方で、この空想は Slay が “*The faithful and rigorous chronology presented in those sections counters the haphazard recollection of the war memories.*” (80) と指摘するように、きちんとした時系列で展開される。ただ、バーリンによると、今回の空想は “*not a dream. Nothing mystical or crazy, just an idea. Just a possibility.*” (27) であり、単なる妄想ごっこではないという。

特に、“*possibility*” という言葉は一体何を示唆しているものなのであろうか。本章では、空想で創り上げる登場人物たちとバーリン自身の関係を探り、前節で分析したバーリンが求めていたものと関連付けながら、バーリン自身の変化を探り、彼が空想の中で見出した可能性を検討していく。

#### 3.1 バーリンとカチアートの関係

バーリンの空想において、逃亡兵カチアートは事あるごとに姿を現しては、その行方をくらませ一行は錯乱させられる。バーリンの戦争体験の回想にもこの兵士は出てくるのだが、Mahili で



“His appearance and behavior match with someone with Down’s syndrome and having mental challenges.” (1399) と指摘されているように、任務中に魚もいない水たまりで釣りをしたり、ずっとニコニコしていたりと、なかなか奇抜な人物として描かれる。子供っぽさが大いに強調される描写も多い。これらの点は基本的に空想中におけるカチアートも同様だ。このような人格を踏まえると、突如として戦場から逃亡するという奇行もいささか納得のいくものではある。

しかし、なぜこのような人物を題材にし、ファンタジーを創作してしまうほど、バーリンはカチアートにこだわりを持ったのか。バーリンにとってのカチアートの存在意義として、Slabey は “For Paul a soldier’s dream of escape is enacted by Cacciato.” (208) と指摘している。確かに、常に戦争を恐れていたバーリンがそれを逃避したいと考えるのは自然な心理であると思える。けれども、そんなことをする勇氣は持ち合わせていないので、代わりに実行してくれる人物を考える。そうなると、カチアートが最適だったということだ。しかし、カチアートはバーリン自らの願望を代わりに実行してくれるだけの存在であったのか。

彼とカチアートのそれまでの関係性を考えると、いかにこの兵士の存在がバーリンにとって大きなものであったかが見えてくる。カチアートの口笛を吹き、釣りをし、キャンディーを舐め、常にニコニコ笑う姿を見ると、戦争ににいるという事実を完全に忘れさせられてしまう。さらに、前章でも言及したが、シドニー・マーティン殺害の際もカチアートはきっぱりと “He’s not all that bad” (239) と（最終的には無理矢理同意させられるが）意見を述べて断る。一見奇妙な雰囲気ながらも、この兵士は常に自らの意思を持ち、どんな時でも己を突き通す強さを持っていると言えるだろう。ましてや、多数決の意見に意志を果敢に表明するくらいだ。この点は臆病で何もできず、ただ周りに流されるバーリンとは大きく異なる。

さらに、バーリンとカチアートのやりとりが最も鮮明に描写されているのが、31 章の夜の行軍のエピソードである。ベトナムへ来て早々仲間の死を目の当たりにしたバーリンは、この行軍中も恐怖に怯え、数を数えたり、仲間の死を考えないようにして必死に気分をごまかそうとする。この時に出会ったのがカチアートであった。彼は、“It’s okay” や “You’ll do fine, …You will. You got a terrific sense of humor” (218) といった言葉を掛け、怯えるバーリンを励まそうとする。持ち前の明るさと夜の行軍に物怖じせず仲間を励ます姿というのは、まさに勇氣と男らしさの象徴であり、父親的な側面が感じられる。カチアートは彼が望んでいたものを持ち合わせた男であったのだ。このバーリンのみが知るカチアートの姿は空想においてもきちんと描かれている。特に、テヘランでバーリン一行が逮捕され投獄される場面では、真夜中にカチアートが現れ、皆を監獄から救出する。“Go!” (243) と叫び、彼ら一行を先導する姿は勇敢な強い男そのものである。

他の兵士からは、精神疾患を抱えている者とさえ言われていたカチアートであったが、彼のどんな時も動じずに動く姿というものをパーリンは一番よく見ていた。戦争から逃亡したいという願望を代わりに叶えてくれる存在といった枠に収まらず、勇敢で確固たる自己を持ち続ける男として、パーリンはカチアートを見ていた。この姿はパーリンしか知らない。これほどの男なら戦地から逃亡し、パリへ行っても不思議ではないと彼は感じ、この兵士を主人公としてキャストしたのであろう。カチアートに可能性を感じたのだ。自身の父親と同様に、カチアートもまたパーリンにとっては、自らの理想像となりうる存在であった。そして現実で見たカチアートの強さを、パーリンは自らの空想の中にもそのまま投影したのである。

### 3.2 サーキン・オウン・ワン

パーリンの空想においてカチアートと同様に大きな役割を果たすのは、ベトナム人少女サーキン・オウン・ワンである。この人物はパーリンが“Just a creature of his own making” (202)と認めているため、完全なる彼の想像物である。パーリンは“*He did not know the people who lived on the land.*” (250)とあるようにベトナム人については何も知らなかった。言葉さえ通じればと嘆くも、その願いは叶わず、彼がベトナム人を理解することはなかった。つまり、このキャラクターはパーリンの独断と偏見に満ちた、思いのままに動く、完全なる彼の理想の女性像の投影なのだ。このような状況では、彼の浅はかな理解に基づいて創り出されたサーキン・オウン・ワンを“*an embodiment of American views about homogenized Asian woman*” (811)であるとWomackが指摘するのも納得がいく。

この少女はアジアン・ビューティーと言わんばかりの美少女として描かれている。さらに、彼と恋に落ち、彼のことを唯一“*Spec Four*” (114)と階級名で呼ぶ。もともとパーリンは“*Private First Class*” (一等兵)という階級であったが、戦時中の9月に“*Spec Four*” (四級特技兵)へと昇格を果たす。空想の中で“*Isn't Spec Four a great name?*” (296)のように、自ら想像したサーキン・オウン・ワンにその名を呼ばせたり、昇進のタイミングで笑顔になった自らの姿を回想している描写は、パーリンがこの階級名を気に入っていたことを示唆している。この女性キャラクターはパリへの道中で常にパーリンのそばにいて、彼を常に優しさと包んでくれる。常に彼を肯定してくれる存在であった。また同時に、他にも病気がちのコーソン中尉にスプーをあげる姿などが描かれていることから、彼女はまるで母親のごとく、パーリン一向に暖かさをもたらしていた。

パリへの道中、パーリン一行はベトナムの地で落とし穴に落下してしまう。一行はトンネルに閉じ込められてしまい、そこでベトナム人将校のリ・ヴァン・ゴクと出会う。敵であるこの将校

に “I fear you gentlemen are my prisoners.” (92) と言われ、一行は行き場を失う。そんな時に皆を救ったのがサーキン・オウン・ワンであった。“There is a way.” (97) と彼女は言い、この状況を打破しようとする。そして、彼女は中尉の手を取りつつ、一行を出口へと先導する。この兵士たちを救う姿というのは、男をも上回るような強さをこの少女は持ち合わせていたことを示唆している。持ち前の暖かさだけでなく、時に強さも見せて、一行を庇護する母親の役割をサーキン・オウン・ワンはここでも果たしていた。こうして、この少女はバーリン隊に受け入れられ、共にパリを目指す存在として旅に参加するのであった。バーリンは自らを抱擁してくれるような母親的存在を求め、生み出したのだ。

### 3.3 空想における二人の人物とバーリンの変化

バーリンの空想を一通り見ると、ベトナムからパリへ行くまでの間にカチアートとサーキン・オウン・ワンはバーリンにいくつもの試練を（直接的もしくは間接的に）与えている。そうして、バーリンは二人の人物との関わりを通じて、空想の世界で新たな自分を描き出すのだ。バーリンとそれぞれの人物との関係を見ていく。

まず、カチアートとバーリンに関しては、一連の追跡劇そのものが試練ともいえよう。空想の序盤では、バーリンの姿は現実とあまり大差はない。常に行軍では最後尾におり、あまり発言もしないのは現実の世界と同様である。しかし、Kaplan が “The Paul Berlin of the Cacciato chapters differs from the Paul Berlin of the war chapters in several ways.” (120) と指摘しているように、カチアートの追跡劇が進むと彼の様子は徐々に変化していく。バーリンとサーキン・オウン・ワンがマンダレーのカフェで休憩していると、僧侶の格好をしたカチアートが遠くに現れた。そして、カチアートは僧侶の集まりの中へと消えてゆく。その際に彼はサーキン・オウン・ワンの手を引き、カチアートを追跡する (121)。“I’m going after him” (121) と力強く叫び、彼は僧侶の群れへと近づく。そうして見せた彼の姿は以下の通りだ。

He paused at the edge of the gathering. For an instant he caught a glimpse of Cacciato, or what might have been Cacciato. He took a breath, ducked his head, and plunged in. . . . He pushed toward the center of the crowd. There was the smell of incense, the deep chanting, a rocking sensation. He pressed forward, using his

elbows, but the crowd seemed to hold him back. He heard muttering and snarls. . . . A dream: caught in an avalanche. (121-22)

サーキン・オウン・ワンはこの後に“Such a hero,” (122) と皮肉を言う。しかし、彼は僧侶の集まりに無謀とも言える突撃をするのである。常に行軍の最後尾におり、怯え続けていたこれまでの彼の気質では考えられない行動である。

一行はテヘランにて最大の危機を迎える。到着して早々に一行は公開斬首刑を目の当たりにする。その後、彼らは違法滞在等の疑いで二度逮捕される。最初はドクの巧妙な言い訳もあり何とか釈放にこぎつけたが、次はそうはいかなかった。そして処刑を匂わされた一行は途方に暮れる。ここでは既に述べたように、カチアートが突如現れ一行を救出するのだが、その際にバーリンは無我夢中でカチアートの後を追いかける。その様子は“fierce, hard, desperate full-out running” (243) と描写されるが、この姿、すなわち凄まじい生への執着心は、これまでのバーリンの性格では考えられない。そして、必死ながらも、“He squeezed Cacciato’s rifle and Sarkin Aung Wan’s hand.” (243) というように、女性の手を引きリードする彼の姿は印象的である。そうして、監獄から脱走した一同は車で逃走を図るのだが、途中でバーリンが運転をする場面がある (246)。これまで、一隊の最後尾にいた男が今となっては仲間を車に乗せ、先導するようになったのは、大きな変化であろう。そして、ルクセンブルグで電車に乗り、一行はパリへと到着する。バーリンの“Proudly, with all the dignity he can command, Paul Berlin is the first step down. . . . Then he waits as the others file off.” (292) という様子は、ここまでの試練を乗り越えたからこそ感じる誇りであろう。コーソン中尉ら仲間を差し置いて、自ら先頭に立つ姿は、これまでのバーリンからは想像がつかないものだ。カチアートはあらゆる形でバーリンへ試練を与え、彼はそれを乗り越え、新たな姿を見せた。脱走兵を追跡する勇敢な姿をこの空想で描き出したのだ。

幾多の困難を乗り越え、勇猛果敢にパリへと乗り込んだバーリンであったが、彼の試練はまだ終わりではなかった。この地への旅路で、常に優しさで彼を包んでくれたサーキン・オウン・ワンの存在が彼を苦しめることとなる。先ほど、バーリンはサーキン・オウン・ワンを一行を庇護する母親のような存在として描いていると指摘した。この母親のような人物が、まるで親が子に試練を与えるかのごとく、最後の試練をバーリンにもたらすのだ。

パリへと向かう途中、彼女にパリについて聞かれても、バーリンはまだ可能性だと言ってはぐらかす。しかし、サーキン・オウン・ワンの理想はエスカレートし、パリへ到着したあとにはア

パートと一緒に住んで、他の連中のことは忘れて、二人で幸せに暮らしてしまわないかと彼に提案する。まだ兵士である彼にとって、この誘惑は大きな試練となってしまう。バーリンはまだカチアート追跡の任務の最中であった。ここで、この提案を受け入れると、自らもカチアート同様に戦争から逃亡したことになる。戦争から逃げ出すか、愛する女性と幸せな生活をするのかという選択に悩まされる。しかし、愛する女性からの提案を断れなかった彼は、この後にオーワンと一緒にアパートを探しに行き、コーソン中尉に離隊を申し込みさえする。この時点で離隊は決まらなかったが、再びサーキン・オウン・ワンは “It is time to choose.” (313) とバーリンに迫る。バーリンが “It was a failure of imagination.” (313) と思わずに嘆いてしまうほどに苦しい状況へと彼は追い詰められる。サーキン・オウン・ワンが与えた試練というのは、あまりに魅力的な提案であったが、まだ兵士の身である彼にとっては苦痛な誘惑でしかなかった。

しかし、事態は急変する。空想のクライマックスにて、突如としてマジスティック・ホテルの会議場でバーリンとサーキン・オウン・ワンが最後の議論を行う場面が現れる。まるで、一国の代表の如く両者は互いに各々の主張をする。サーキン・オウン・ワンは次のように訴える。

“Spec Four Paul Berlin: I am asking for a break from violence. But I am also asking for a positive commitment. You yearn for normality—an average house in an average town, a garden, perhaps a wife, the chance to grow old. Realize these things. Give up this fruitless pursuit of Cacciato. Forget him. Live now the dream you have dreamed. See Paris and enjoy it. Be happy. It is possible. It is within reach of a single decision.  
(317)

彼女はバーリンに戦争から逃げ出し、普通の生活へ戻るように誘惑をする。ここで言及されている理想というのは典型的な幸せな世界であり、戦争を恐れ、一刻も早くこれから逃れたいと考えていた彼を説得するには最適なものように思える。つまり、彼女は「安定」を提案したのだ。今すぐ戦争を離脱すれば、愛する女性との幸せな生活はすぐに目の前にあったのだ。これに対して、バーリンは自らの主張を展開する。ここで彼は、自らが今カチアート追跡という義務を背負っていることを伝え、まだ戦争から離脱することは出来ないと言う。

I do know when I feel obliged. . . . it is a personal sense of indebtedness. It is a feeling, an acknowledgment, that through many prior acts of consent we have agreed to perform certain future acts. I have that feeling. . . . By my prior acts—acts of consent—I have bound myself to performing subsequent acts. . . . I accepted a promotion and the responsibilities that went with it. I joined in the pursuit of Cacciato. . . . I tied myself to this mission, promising to see it to its end. (319)

あれほど戦争を怯えていたにも関わらず、これに身を投じる決意をしたのである。だが、この後すぐにパーリンは率直な想いを語る。それは自らの義務というものは実は「人々」に対するものであるという (320)。この義務について彼は正直に打ち明け、自らの葛藤も暴露する。

I confess that what dominates is the dread of abandoning all that I hold dear. I am afraid of running away. I am afraid of exile. I fear what might be thought of me by those I love. I fear the loss of their respect. I fear the loss of my own reputation. Reputation, as read in the eyes of my father and mother, the people in my hometown, my friends. I fear being an outcast. I fear being thought of as a coward. I fear that even more than cowardice itself. (320)

この葛藤に関してはオプライエンの他の作品でも扱われるテーマである。戦争から逃げるのが怖いのではなく、それまで自らが積み上げてきたものを失うのが怖いというテーマだ。代表作 *The Things They Carried* (1990) の短編 *On The Rainy River* の主人公は、大学卒業を控えた夏に徴兵を受ける。彼は常々ベトナム戦争を “the American war in Vietnam seemed to me wrong. Certain blood was being shed for uncertain reasons.” (*The Things They Carried*, 38) と考えていた。カナダへの逃亡も考えた主人公を襲ったのは、その選択肢が祖国アメリカ、自らの故郷や家族への裏切りになるのではないかという感情だ。(I would not swim away from my hometown and my country and my life. (55)) この主人公も、パーリンと同様の葛藤を抱えているのが分かる。

パーリンが自らの気持ちをこの会談できちんと述べていることは印象的である。サーキン・オウン・ワンの訴えに関する彼のこの回答については、Wilson が、“Even in his imagination, Berlin retreats into official slogans and platitudes, unable to either imaginatively or intellectually transcend the propaganda of his own government.” (59) と指摘している。パーリンの主張は結局言い訳であり、やはり母国を裏切るとい

う行為は臆病な彼にとっては不可能なことで、戦争を選ばざるを得なかったという否定的な見方が多い。けれども、自らの答弁を始める前にパーリンが見せた“His hands are steady. His eyes, set wide, are equally steady. No signs of timidity or bashfulness.” (319) という力強い姿勢というのを見ると、弱々しくただこの戦争に屈したようには思えない。サーキン・オウン・ワンが仕掛けた最大の誘惑、すなわち「安定」の提案に対して、パーリンはそれを捨て、任務へと身を投じる英雄となる決意をした。自分と真摯に向き合い、自らの主張を力強く行う姿をかつてのパーリンから想像することは出来たであろうか？誘惑に打ち勝ち、脱走兵を追跡する、彼は空想の中でヒロイズムの自己を生み出すことに成功したのだ。

最終章でサーキン・オウン・ワンは突如として失踪する。ワンと出会い、パーリンは常に彼女の温かさを享受してきた。道中、常に彼を受け入れ、時として困難から救ってくれたこの人物は、まさに母親のような存在であった。常に恐怖で怯え、一隊の中で役に立っていてもいえない彼だからこそ、このような女性を想像したのであろう。そして、パリへ到着するやいなや、ワンは最大の試練を与える。それをも乗り越えた彼は、ついに勇敢な男らしい自分という可能性を見つけた。子が親から自立するのと同様に、パーリンもまた「母親」から自立したのである。

### 3.4 空想の終焉

ついに、ポール・パーリンは数々の試練を乗り越えて、憧れの自分を空想で描き出すことに成功した。ベトナムの地でカチアートを追い詰め、そこで怯えて失禁した自分はいない。そうして、自ら作り上げた師たちとの決別を果たすことができた。では、この空想はどのような結末を迎え、最終的にパーリンはどうなってしまうのか。

45章で“The night was over. The sea was blue. Soon the others would be awake. The day would start.” (322)とあるように、夜警任務は終わりを迎えるようとしていた。パーリンは再び哨戒地点で記憶を整理する。そして朝になれば、再び戦争がやってくるのだ。これに伴いパーリンの空想劇も終わりを迎えるようとしていた。

そして、空想は最終章を迎える。冒頭、サーキン・オウン・ワンとコーソン中尉は突如として失踪し、残されたアメリカ兵たちはカチアートを確保する作戦を立てる。一行はパリ市内を行軍し、カチアートが宿泊するホテルを探す。ただ、この最中パーリンは“Paris, Paul Berlin was thinking, but the feeling was Quang Ngai. He told himself to be brave.” (326)と奇妙な感覚に陥る。彼の空想の中にベトナムの影が見え始めたのである。

そうして、ホテルを突き止め、一行は突撃を図る。その際に、2章で指摘したとおり、バーリンはオスカーにお前は不要だと通告される。しかし、必死の訴えもあり、彼はオスカーにライフルを渡される。ホテルの上階へ行き、カチアートの部屋の前で突撃を命じられたバーリンであったが、“Suddenly he was on his knees. He couldn't stop shaking. He squeezed the rifle. He held on tight, but the shaking wouldn't stop.” (330) ともはや任務も遂行できないほどに怯えてしまう。そうして、ライフルを落とし、“Then there was a floating feeling, then a swelling in his stomach, then a wet releasing feeling.” (331) と彼は再び失禁してしまう。こうして、カチアートの追跡劇は終わった。そして、彼が目覚めるとそこはパリではなくベトナムで、失踪したはずのコーソン中尉に声をかけられていた。この瞬間は、バーリンが空想から現実世界に戻ったことを示している。

空想が終わりを迎えた頃にはもう現実世界は朝方で、バーリンのすぐ目の前には戦争が迫っていたのだ。幾多の試練を乗り越え、強い英雄のような自分を描いた空想の最後の最後に、ベトナムの影が再び現れ、またしても任務をまともにこなせない臆病な自己を想像している。このバーリンの空想における変貌というのは、彼が戦争という現実には打ち勝てなかったことを明確に表している。彼の心の乱れがそのまま空想に投影されてしまったのである。自らが想像した男らしい姿は現実では通用しなかったのだ。戦争で自らが勇敢になれるという可能性の追求は、最終的に失敗に終わってしまった。

#### 4. おわりに

ポール・バーリンには現実世界において父親という師のような存在があり、彼の背中を見て育った。戦地へ行った後も、父親の教を忠実に守っていた。そして、勇気の象徴である Silver Star を父に見せる妄想をしてしまうほどに、師である父親へ勇敢な自分を見せたいと常に願っていた。

戦地へ赴いたバーリンがある種の共感を抱いていたのが、シドニー・マーティン中尉であった。両者の任務に対する気持ちのズレが皮肉的に描かれている一方で、理想を抱えている点や、同じ新兵であるという境遇を持っているあたり、バーリンがこの兵士に親近感を抱いていたのは間違いない。しかし、最終的には仲間によりこの兵士は殺害され、バーリンはこれに加担してしまったことを後悔する。もしも彼に勇気があれば未来は変わっていたのかもしれない。この二人の人物との関わりを通して、彼は戦地で勇気を持つ英雄のような自己を求めていくようになったのだ。Silver Star を獲得するような自分だ。



物事を時系列ごとに思い出せないほどに追い詰められていたバーリンは現状を打破しようと空想の世界に逃げ込む。一見するとただの現実逃避の夢物語のように感じられるが、バーリンは想像の中で、2人の人物たちによって課される試練を乗り越え、だんだんと新たな自分という可能性を見出してゆく。カチアートとワンという2人の親的存在から自立した彼が見出した可能性が、男らしい自分の姿である。もう、恐怖に怯える、役立たずの自分は存在しないと実感したのである。

最終章において、再びパリの地で一行はカチアートを追い詰める。しかし、バーリンは最後にライフルを持ってカチアートへ向かおうとするも再び失禁してしまう。そして、気がつくど彼はベトナムにいた。ここで、再び空想は振り出しに戻ってしまい、完全に崩壊してしまっている。これは、空想を行っていた哨戒地点で彼は朝が来ることを実感したからだ。再び恐れていた戦争がやってくるのだ。彼の動揺はピークに達し、やはり現実世界では男らしくなれないと感じ、思わず空想が崩壊してしまったのだろう。だからこそ、このような情けない終わり方になってしまったのだ。

ポール・バーリンは男らしさに憧れ、自らがそうなれる可能性を見つけたのだが、結局はこの試みは失敗に終わってしまう。オブライエンは、勇敢な男らしさが期待され、それが英雄視される戦争で葛藤する兵士の苦しみを巧みに描き出す。戦場で戦うにしても、それから逃亡するにしても、必要なものは勇気である。それを持たない兵士であるバーリンは、恐怖に怯える自分に嫌悪感を抱き、何とか状況を打破しようとする。その際に、選んだ手段が空想世界に逃げ込み、新たな自分の可能性を探ることであった。しかし、戦争という現実が再び迫ると、結局その試みは失敗に終わってしまった。このバーリンの姿から、オブライエンは、戦争において英雄など存在しないという真理を我々読者に伝えようとしているのではないだろうか。

## 参考文献

- Calloway, Catherine. "Pluralities of Vision: *Going After Cacciato* and Tim O'Brien's Short Fiction". *America Rediscovered: Critical Essays on Literature and Film of the Vietnam War*, 1998, pp. 213-24.
- Heberle, Mark A. *A Trauma Artist: Tim O'Brien and the fiction of Vietnam*. Iowa: U of Iowa P, 2001.
- Herzog, Tobey. "Going After Cacciato: The Soldier-Author-Character Seeking Control". *Critique*; Winter83, vol. 24, 1983, pp.88-97.
- *Tim O'Brien*. Twayne Publishers, 1997, pp. 78-104.
- Kaplan, Steven. *Understanding Tim O'Brien*. U of South Carolina P, 1995, pp. 82-126.
- Mahini, Noor. "Tim O'Brien's 'Bad' Vietnam War: *Going after Cacciato* & Its Historical Perspective". *Theory and Practice in Language Studies* 8(11), 2018, pp.1397-1406.
- McCaffery, Larry. "An Interview with Tim O'Brien". *Anything Can Happen : Interviews with Contemporary American Novelists*. U of Illinois P, 1983, pp. 262-78.
- O'Brein, Tim. *Going After Cacciato*. Broadway Books, 1978.
- *The Things They Carried*. Mariner Books, 1990.
- Slabey, Robert M. "Going After Cacciato: Tim O'Brien's 'Separate Peace'". Gilman and Smith, 1990, pp. 205-12.
- Slay, Jack, Jr. "A Rumor of War: Another Look at the Observation Post in Tim O'Brien's *Going After Cacciato*". *Critique* 41.1, 1999, pp.79-86.
- Smith, Patrick A. *Tim O'Brein . A Critical Companion*. Greenwood P, 2005. pp. 61-80.
- Womack, Anne-Marie. "Just a Creature of His Own Making': Metafiction, Identification, and Gender in *Going After Cacciato*". *Modern Fiction Studies*. 59(4). The Johns Hopkins U P for the Department of English, 2013, pp. 811-32.
- 田吹香子. 「『カチアートを追跡して (*Going After Cacciato*) 』 (1978) における『空想』と『現実』の境界」. *Kasumigaoka Review* (福岡女子大学英文学会誌) . 福岡女子大学, 2008年, pp.47-60.